

樋井梁歩 ひらやぶ 詩人、評論家。明治二十年十月十五日秋田縣仁井田村生れ、昭和十三年九月十三日歿（八七—一九三六）。本名金太郎。第一高等學校英法科中退後、一年志願兵として弘前第五十二聯隊に入營。

明治四十五年イギリスに渡り農村調査、翌年アメリカに移りミズーリ州州立大學農科に入學。大正四年歸朝、郷村で農場經營に當り、傍ら筆を執りて詩、評論等を發表、著書『土の精』（大正五年一月一日第三帝國社「筆と鐵」）を出版。九年再びアメリカに渡ると、父の死におり歸國。郡農會等の幹部として働く一方、農民新生運動を提唱して雑誌『大道』を創刊、評論集『農民新生への道』（大正十五年二月五日平凡社）、『大道無聲』（大正十五年十月二十日平凡社）を著はす。

昭和二年『蘆花全集』刊行事業に加はり度々上京。六年にはホイットマン詩集『ワットマン對峙草の葉』（二月十五日春秋社）を譯刊。翌年一家を擧げて朝鮮に移住、京城郊外で養鶏業を營む。一高時代ホイットマンと共に讀み始めたソローに就いて『野人ソロー』（昭和十年六月二十日不二屋書房を著す）、またオマル・カイヤームの四行詩に傾倒、『カス留孟邪土』（昭和十一年二月一日、續いて『カス異本留孟邪土』十二年一月二十一日私家版）と題して譯刊した。晩年の一時期、朝鮮總督府圖書館の嘱託としておたが、胃癌に於て歿す。

歿後、ホキットマン『草の葉—自己の歌』（宮崎正行衛門編著、昭和二十一年五月十八日春秋社松柏館）、『ルバイヤット—留孟邪土』（柏

場信太郎編、昭和四十七年九月二十日秋田・叢園

社「叢園叢書」）出版。柏場信太郎編『梁歩の横顔

—追憶集』（昭和十五年十二月二十日秋田・土筆社）



柳澤七郎編 堀井梁歩の面影(昭和四十年十一月神奈川・いづみ苑)  
がある。